

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：24301
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24320043
 研究課題名(和文)「生存の技法/医療・芸術・脳科学融合領域研究」～新たな人間観に基づく表現論の創成

 研究課題名(英文)"Techniques of Existence:Medical/Arts/Brain Science Interdisciplinary Research"
 Creation of New Expression Theory Based on the New Human Outlook

 研究代表者
 建畠 哲(tatehata, akira)

 京都市立芸術大学・その他部局等・その他

 研究者番号：50125217

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：人間というconditionとその生存の基盤について、芸術・医療・脳科学・哲学分野の共同による総合的観点から捉え直し、研究会・シンポジウム・公開実験制作・調査・展覧会など多角的な試みを通じて検証する実践的な研究制作を行った。第一段階では各領域を取り囲む「視の制度」について、身体・知覚・記憶に関わる「認識のプロセス」を中心に領域間の「視差」をつなぐプラットフォームとした。第二段階では装置・技術に関わる言説と「行為を誘発する装置」に関わる制作・実験を中心に進めた。最終年度は、場・建築・人間関係を含む制度的環境すなわち「制度に於ける関係性」の再構築に関わる研究・制作を中心に進めた。

研究成果の概要(英文)：In this study, about the human condition and the foundations of its existence, re-captured from a comprehensive point of view through the fields of art, medicine, brain science, and philosophy, we undertook practical research work to validate the evidence through a multi-faceted attempt including research meetings, symposia, execution of open experiments, research, and exhibitions. The first year, the priority was about the "system of views" encompassing each discipline, and the "process of recognition" related to perception, and memory. The following year, centered on production and experimentation related to "devices that induce action," with a focus on the problem of the creative act and discourse related to equipment and technologies that shape the subject. The last year, we proceeded with research and production related to the reconstruction of the institutional environment that includes place, architecture, and human relations, that is to say "relationships in the system."

研究分野：芸術諸学・美術批評

キーワード：芸術 脳科学 生存 医療 多感覚 記憶 環境 法

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、2009年度にスタートした領域横断プロジェクト「Trouble in Paradise:生存のエシックス」がある。これは、表現論理に関わる芸術を媒介にして生命・医療・環境領域の研究と日常生活の関係を考察する実践的な研究・制作であり、芸術が領域横断的研究の豊かな母体となり得ることを示した。上記のプロジェクトを検証する中で、我々は、認知プロセスにおいて、全体・像が予想できない状態で近傍の「てがかり」を特異点として抽出し、その連鎖から生成されるパターンに着目した。それを「新たな回路の創出につがる可塑性」として考察し、自己概念の形成、さらには生命体の進化過程にまで関わるのではという見解を得た。本研究では、医療・芸術・脳科学領域から、この「新たな回路の創出につがる可塑性」について検証する為に、特に「自己・身体・環境の相互作用とそれが情動反応・知覚_感覚・自己定位さらに高次認知作用に及ぼす影響関係」に着目した実験・試作の構想をえた。一方、これまでの研究の反省点として、先端医療機器による「脳神経活動の可視化技術」という制度が主体・自己・対象・観察という概念にもたらず変容や芸術に於ける意味を歴史的・哲学的に検証するチーム作りの必要性を見いだした。

2. 研究の目的

本研究は、人間という condition とその経験の成り立ちについて、芸術・医療・脳神経科学融合領域という独自の観点から捉え直す事で、新たな人間観(身体・感覚・健康)に基づく表現論理の創成とその成果を作品制作・教育・作業療法などへの還元する事を目的とした実験・制作・検証を行う実践的なものである。自己・身体・環境の相互作用とそれが情動反応・知覚_感覚・自己定位さらに高次認知作用に及ぼす影響関係を探る作品・装置を作成し、生体機能の情報化技術に関わる先端医療機器を駆使した実証的検証と、脳神経科学の成果に基づいた理論化を図る一方で、この理論をあらためて芸術表現における先行事例・臨床医学・哲学の立場から、歴史的・批判的に検証し、従来の芸術や科学の在り方を根本から問い直す相互再編的な研究を目指したものである。

3. 研究の方法

A) 表現・制作グループ(B)実験・検証グループ
(C)総合的分析・理論化グループ(D)理論評

価・検討グループの四つの研究グループを構成し、それらの共通のプラットフォームとなるキーワード・基礎概念の設定と方法論について、研究会・シンポジウム・公開実験・海外調査・展覧会という多角的な試みをつうじて検証する。(1)身体の内的環境と感覚・情動(個/内へのベクトル)、重力・空間など環境と身体との相互作用(個と環境/外へのベクトル)と二つのベクトルに関わる実験的作品の制作(2)これらを脳情報処理に関わる基礎的研究と臨床認知科学に関わる臨床的研究という異なった位相から、検証を進める。(3)脳神経科学からの総合的解析と、芸術学領域からの歴史的総合的分析という異なる領域から理論構築を進める。(4)医療・介護など現場に関わる臨床哲学と脳活動の可視化技術に関して美学から批判的検証を行い、その成果を教育・医療など現場での人材育成や実践へと展開する基盤とする。

4. 研究成果

A)表現・制作においては、体性感覚と視覚との統合・乖離の感覚を生み出す装置として、2軸で回転するモバイル式円盤ステージを作成した。これは、実験室内だけでなく、屋外環境や茶室など固有の性質を持つ生きた環境での使用を可能にした。B)実験・検証では、上記の装置を身体運動図式とイメージの形成の関係を頭頂葉・前頭葉・前庭の関係から捉え検証すると共に、ミラーニューロン並びに、言語野との関係からの考察や多感覚や共感覚との相違点を検証した。C)総合的分析においては、これを「行動を誘発する装置」という概念でとらえる事で発達障害・認知症などを有する人の特徴的な知覚と美術・建築・庭園・作法などとの関係を考察する基盤を検証した。これら表現・制作、実験・検証、総合的分析を基盤としてD)理論評価・検討においては、芸術家による公開実験・制作と芸術家・脳科学者・哲学者・美術評論家・詩人・法学者・音楽家等による口頭発表を組み合わせた展覧会・シンポジウム・公開実験を各年度を通じて開催した。以下が主な内容である。

□「物質と記憶」京都芸術センター



2012年11月7日
「物質と記憶」と題した公開実験・シンポジウムを小学校跡地を利用して造られた京都芸術センターで開催した。

シンポジウム構成

・「脳の来歴-イメージ・知覚・身体」

下條信輔（カリフォルニア工科大学実験心理学教授）

・「あいだ哲学によるベルグソン」

篠原資明（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

・「体操と建築」

建畠哲（京都市立芸術大学学長・詩人・美術評論）

・「星座法によせて～Sight-Seeing/Site-Walking」

高橋悟（京都市立芸術大学教授・構想設計）

下條教授は、逆さ眼鏡の研究に始まり、感覚代行装置の研究まで、知覚の研究を通じて、主観的経験と客観的経験を結びつける実証的な検証を基盤にして、ヒトの認知・知覚への理解を拡張する研究を続けてきたが、近年は、潜在知をテーマに、マスメディアや社会に於ける人間の認知・知覚に関わる総合的な研究も進めている。シンポジウムでは、下條教授は、視覚対象を聴覚刺激パターンに変換して与えることで新たな経験を生み出す感覚代行装置や共感覚と創造性の問題について脳神経科学の視点から分析し、知覚・身体・言語・イメージの相互作用を明かにした。篠原教授は、初著「漂流思考」から近著「ベルクソン あいだ哲学の視点から」にいたるまで、ベルクソン哲学を望遠鏡として芸術に接続する思考を展開してきたが、今回は「いま・かつて・間」という誰もが共有しうる明快な概念を基に、ベルクソン哲学と感覚・記憶・創造性の問題を緻密に分析した。建畠は、キュレーターとして国際展覧会を企画すると同時に美術批評家として活動を続けてきたが、今回は詩人の立場から「読む」行為、「見る」行為、「歩く」行為の関連について、主に後期マラルメの詩の考察を通じて行うことで、言葉と視覚と身体との遭遇による創造的生成過程について述べた。以上3つのレクチャーの後、高橋悟教授が3D動画とインスタレーションと断章形式のトークによる実験的プレゼンテーションを行った。続くパネルディスカッションでは「共感覚」と「感覚の異交通」の関係、表現領域に於けるジャンル論と神経科学、記憶/知覚と個/類の関係などについて哲学・芸術・脳神経科学の領域を横断する議論が展開された。

「ゆるる茶会」京都芸術センター

2013年2月23日



「ゆるる茶会」と題した実験的なシンポジウムを開催した。自己・定位・体性感覚・視覚の関係に動揺を与える2軸回転装置を茶室に設営し、哲学、脳科学、茶道の専門家を招き、茶会の形式を使用した公開実験であり、他者とのコミュニケーションや関係性を再構築しうる場の提案ともなった。

□「美意識の変容」大阪市中之島公会堂

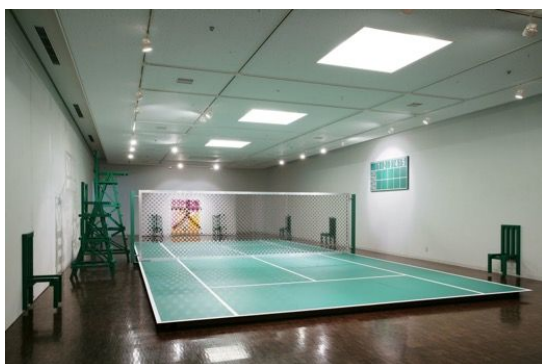
2013年1月5日



「美意識の変容」シンポジウム・展示を精神分析医で京都大学大学院人間・環境学研究科の新宮一成教授と開催した。講演は、新宮教授「フロイトは何を見ていたのか」に加え、哲学者の鷲田清一（大谷大学）による「芸術における生（なま）なもの？」、建畠哲による「草間弥生の世界-オブセッションと救済」である。これは、「物質と記憶」シンポジウムでは、触れることのできなかった精神分析・現象学から芸術領域への考察となり、脳科学・ベルクソン哲学とは相補的な関係となるアプローチであった。展示では、重要文化財である特別展示室や、中集会室、小集会室の特性を活かしつつ言葉・身体・イメージの潜在的な関係を考察することを試みた。高橋悟教授は、「Now Where/Now Here-ふろいとといとまき」と題した装置の展示を特別室で行った。（公開堂

の天井画を二軸でゆれながら回転する色鏡にうつしこみ、観客に身体が浮遊する感覚を起こさせる装置。「見下ろす」姿勢からオレンジ色の鏡の反映をとうして「見上げる」ことや、「自己の鏡像」と「ドーム型の天井画の人物」の揺れの相互作用で、視覚と前庭・体性感覚の関係の齟齬と、定位するイメージの形成過程を考察する試みである。）
 「物質と記憶」実験プレゼンテーションでのデジタル映像の投射とは異なった知覚への直接的な動揺の効果を与えることができ、次への展開に繋がる機会となった。

「犬と歩行視」part-1,part-2
 京都市立芸術大学ギャラリーアクア
 2013年3月16日～31日 (part-1)
 2013年10月11日～11月17日 (part-2)



身体・知覚・記憶と創造行為の問題に焦点をあて、「行為を誘発する装置」の検証を目的とした制作展示・ワークショップ・シンポジウムを開催した。展示室には、多孔質の鏡面を介したテニスコートを設置した。観客は多様な視線の運動・複数の役割を鏡面を通じてテニスゲームのように演ずることができ、自己・他者・コミュニケーション・身体について考察する場の提供となった。また、3次元コンピューターグラフィクス、ダイアグラム(図表)、指示書、モデル、イラストレーションなど数値化とは異なる資料記録化について理論的な検証を行った。さらに「行為を誘発する装置」について、視覚と言語と身体感覚の交通の視点から共感覚や共運動感覚を中心に検証し、道具・家具など日常的な環境の中で人の振る舞いと、作業療法などで使用される遊具・装置との関係についても検証した。

シンポジウム構成

「事故者と犬 - 絵画・言語・身体」

出演：林剛(美術家) 高橋悟(美術家) 建畠哲(詩人)・

美術批評・京都市立芸術大学学長) 森村泰昌(美術家)・
 河本信治(京都国立近代美術館特任学芸員)

・「サバイバル・マインド～空間の言語」

下條信輔(カリフォルニア工科大学実験心理学教授)

・「死語/私語のレッスン」

建畠哲(美術評論家・詩人)

篠原資明(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

・パフォーマンス「新しい宿に寄せて」

劇団けのび

「横浜トライアル」横浜美術館
 2014年8月1日～11月4日



最終年度に於ける中心的な実践として三ヶ月の期間、美術館内に巨大な実験的装置を設置し、その場を「見る・看る・観る・診る」事を巡るアリーナ・法廷として公開実験・展示を行った。近年の精神医療に於いては病そのものだけでなく、場・建築・人間の関係性も含めた環境を病を取り囲む制度として捉え、それらの関係性を再配置する試みが進められている。それは医療に於ける知・権力・技術の配分方法を検証し、患者・医者・看護師などの「診る・看る」事の制度的関係性を再構築する試みと言える。美術に於いても、同様に「見る」事の制度的環境、つくる、観る、書く、売る、教えるといった固定化された役割分担・制度的関係性の検証が必要となる。上記の内容を多角的に検証するために、領域を超えた複数の専門家をまねいた実験的シンポジウムを「横浜トライアル」という名称で開催した。演劇でも、講義でも、パフォーマンスでもない、「その他の新しいケース」という意味で、この催しには、「CASE」という名称をつけた。Caseとは「訴訟」の意味を含むが、今回は、裁判のスタイルを借りて、陪審員(事前に公募した中から選ばれた方と、こちらで指名した方の合計11名が陪審員として参加します。)、傍聴人(Caseが開かれる当日に、整理券を発行し、先着20

名の方が、傍聴できます。)として観客の方々に参加していただいた。これらの Case が、開催中は、「審議中」の札が赤い法廷の入り口に掲示され、法廷内への入室は禁止となる。審議中は、他の観客は入室出来ない事が、重要なポイントであり、「排除と選別」のシステムを「可視化」し、「排除されることにおいて、観客は、このゲームに参加している」という事になる。

プログラム構成

- ・「非人称の光」8月6日

建畠哲(詩人・美術評論家・京都市立芸術大学学長)

加治屋健司(美術史研究・京都市立芸術大学芸術資源研究センター准教授)

高橋悟(京都市立芸術大学美術学部教授)

- ・「日本国憲法をラップする」8月15日

Shing02 (MC) , 1945 KURANAKA(DJ)

- ・「自由意志は存在するか」9月11日

下條信輔(カリフォルニア工科大学教授・実験心理学)

高橋悟(京都市立芸術大学美術学部教授)

〔今後の展開に向けたまとめ〕

本研究では、人間という condition とその生存の基盤について、芸術・医療・脳科学・哲学分野の共同による総合的観点から捉え直し、研究会・シンポジウム・公開実験制作・調査・展覧会と通じて検証する事を目的としてきた。今後は、「制度に於ける関係性」の再構築に関わる研究・制作を基盤に、改めて、より実践的に異領域間の「視差」をつなぐプラットフォームの構築を目指すと共に、教育・臨床現場への応用を課題とする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- ・高橋悟
「創造における言語・身体・記憶への断章」
査読なし
2013年 こころの未来 No10 P20~25
- ・高橋悟 「何処にもない記憶」査読なし
2013年 京都市立芸術大学研究紀要 No57
p45~57
- ・高橋悟
「記憶・知覚・身体への芸術的アプローチ」
査読なし
2013年 心身変容技法 P195~206

- ・高橋悟「犬と歩行視」査読なし
2014年 京都市立芸術大学研究紀要 No58
P43~51
- ・高橋悟「法と星座」査読なし
2015年 京都市立芸術大学研究紀要 No59
p33~P37

〔学会発表〕(計 10 件)

- ・建畠哲 「体操と建築」
2012年 11月 16日 京都芸術センター
(京都府京都市)
アーカイバルリサーチ研究会
- ・建畠哲
「草間弥生の世界~オブセッションと救済」
2013年 1月 5日 大阪中之島公会堂
(大阪府大阪市)
- ・建畠哲 「私語/死後のレッスン」
2013年 11月 16日京都市立芸術大学
アクアギャラリー(京都府京都市)
犬と歩行視実行委員会
- ・建畠哲 「開かれた詩に向けて」
前橋文学館(群馬県前橋市)
Poetry/Art
2014年 9月 27日
- ・高橋悟「星座法によせて」
2012年 11月 16日 京都芸術センター
(京都府京都市)
アーカイバルリサーチ研究会
- ・篠原資明「あいだ哲学によるベルグソン」
2012年 11月 16日 京都芸術センター
(京都府京都市)
アーカイバルリサーチ研究会
- ・篠原資明 「私語/死後のレッスン」
2013年 11月 16日京都市立芸術大学アクア
ギャラリー (京都府京都市)
犬と歩行視実行委員会
- ・十一元三「広範性発達障害の理解の現在」
2013年 10月 11日
札幌コンベンションセンター(北海道札幌市)
日本児童青年精神医学会
- ・十一元三「大人の発達障害をどう捉えるか」
2014年 2月 14日 大阪大学中之島センター
(大阪府大阪市)
奈良臨床心理士会
- ・森公一「情報メディアの応用と演習」
2014年 10月 7日 同志社ローム記念館
(京都府京田辺市)
情報メディア学研究

〔図書〕(計 1 件)

- ・建畠哲 「死後のレッスン」思潮社
2013年 総ページ 112 頁

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/archivesforcreation/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

建畠哲（公立大学法人京都市立芸術大学学長）

研究者番号：50125217

(2)研究分担者

高橋悟（公立大学法人京都市立芸術大学教授）

研究者番号：30515515

(3)研究分担者

十市元三（京都大学医学部教授）

研究者番号：50303764

(4)研究分担者

森公一（同志社女子大学学芸部教授）

研究者番号：60210118

(5)連携研究者

篠原資明（京都大学人間環境学部教授）

研究者番号：60135499